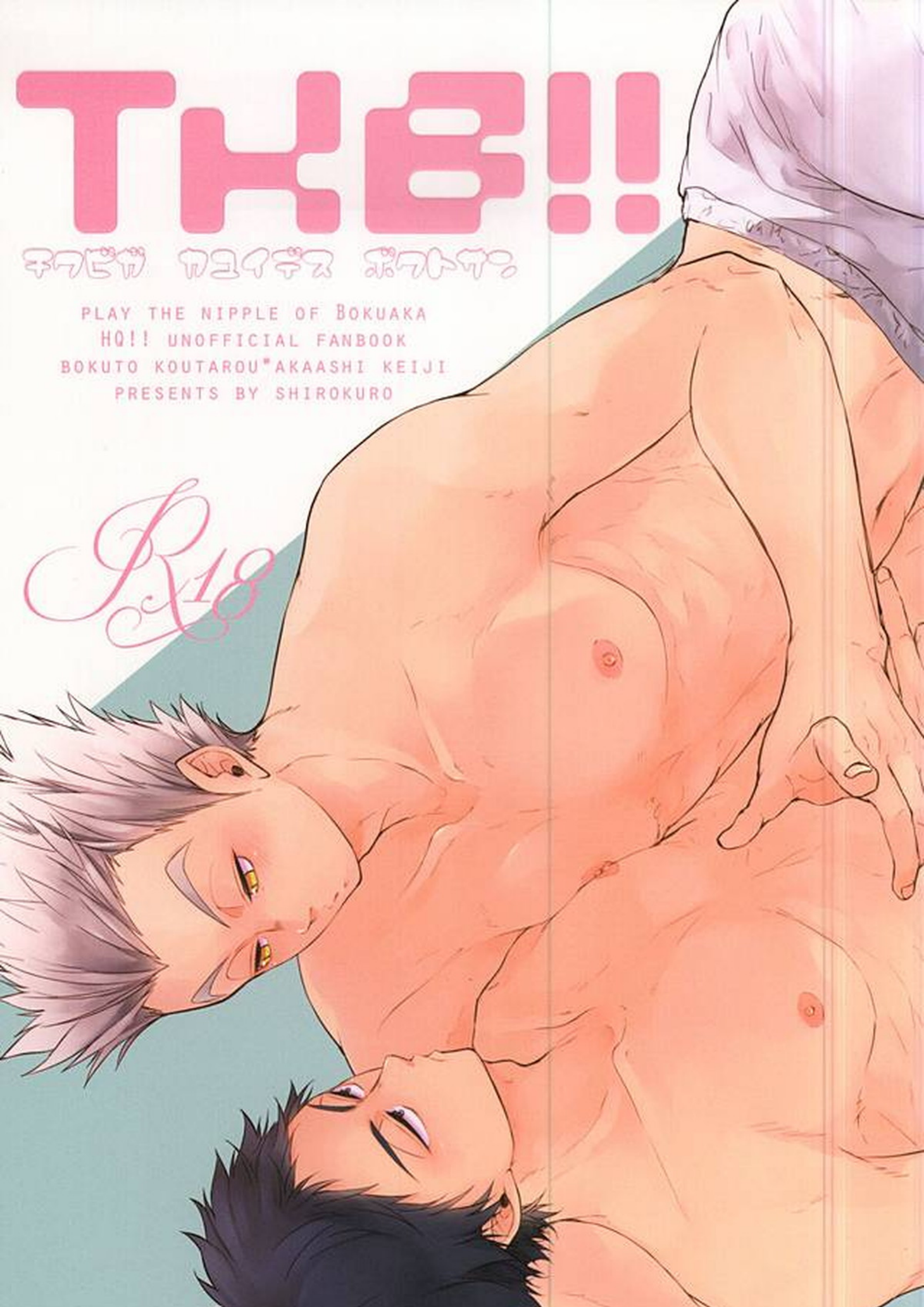


THE!!

フツブツ ツヨイツヨ ぶっぴん

PLAY THE NIPPLE OF BOKUAKA
HQ!! UNOFFICIAL FANBOOK
BOKUTO KOUTAROU*AKAASHI KEIJI
PRESENTS BY SHIROKURO

R18







よみがえる記憶



自己嫌悪



いやでも誰かに
見られたら...

あーかゆい...
いつも掻い
ちやおうかな...



あッス!

おねがいします!

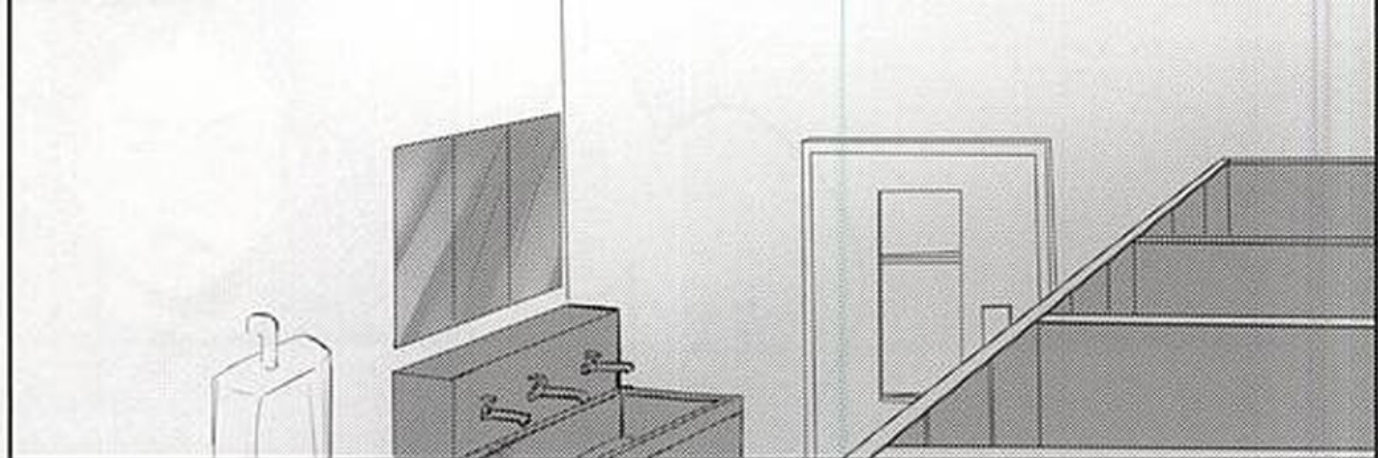
次
赤葦!

サーブ!



















それ、
全然大丈夫そうじゃ
ねえじゃん

ぐぐぐ!!



ちよっ
なにで…!

こっちの
セリフ何だけど?



なあ、
中入れて?



それならそれで
腹でもさすって
やるけど……



俺が…
本当にうんこ
してたらどうする
んですか…

んー?







こんなんで感じてたら
絆創膏貼っても無くても
一緒じゃね?

んっ、んんん...っ!

や...そんな

触り方...ッ!



なに...

触り方に
文句言うの?



ああ、ああ
や、ごめんなさ...

それ...っ
や...!

...っ!

エースの心得

...



あ~~~~~
うそうそ
ゴメン
し
意地悪言った!

ぶっちゃけ
俺も共犯だし…

しかしそこまで
敏感になつて
たとは…

ほら、
そういう時
なんてーの?

俺、赤葦に
ちゃんと
言つて欲しいな—

っん、
触ってください
木兎さんに…

触ってもらうの
気持ちいいから…

その
指と

口で…

ぐりぐりつて
してください…っ

















っあ、ん

はッ

あ

っう

やです...ッ

ぼくとさんが
早くイってくださいよ...

乳首で
感じてくせにっ!

っあう...

あ、あかあし
だって!

ふああッ!





かわいい

イーネ

の

ル

10

10

ブルブル



あ
も

そんな意地になって
俺のおっぱい
吸っちゃって...

はな



ッ!
!?

おっぱい





さめ

練習
戻りましょう



赤葦乳首
立ってる!!!

……

キヤ

そんなこと
言ったら……

木兎さん
だって!

俺より余計目立ってます
(筋肉量)

ぎゃー——!!!

バイ——!!!

男子便所

そんなことも
あろうかと
俺、絆創膏
持ってますよ

部室のカバンに……

さ、さすが
あかあし!

準備いい!

思ふが
どにかい

このあと
めちやくちや
自主練した

強化月間

ばっこ

「あ、つだめ、乳首弱いのっ！」

たわわに実った乳房を揺らし、乳首を責められて狂ったように喘ぐ女優を見て一言。

「女の子ってこうもよく乳首で感じてすごいですよね」

木兎の自室であるにも関わらず我が物顔でお菓子をバリバリ咀嚼しながら赤葦はなんでもないので言い放った。

木兎にとってそれは衝撃的のセリフだった。

赤葦の乳首は性感帯に決まっている、とてつきり思い込んでいた木兎が先程のアダルトビデオを見た結果があれだ。

いつも頬を染めて体を振る赤葦に、お前はこんな風に乱れていると知らしめて羞恥に悶える姿を期待した。

しかしその期待に反して赤葦は恥じることもなければアダルトビデオ自体に関心さえ向けず、バレエボール特集の組まれた雑誌をバラバラと捲るだけだった。

「え、赤葦それマジでそれ言ってるの」

拍子抜けした木兎が思わず口にする。

呆然と見つめてくる姿に、何も驚くようなことでもないだろうとでも言いたげに赤葦は雑誌を閉じた。

「だって、赤葦さあ、いつもあんな風に喘いで——」

「木兎さんの好みはだいたい把握してますから」

いまいち会話が成り立っていないことにますますわからなく

なった木兎が赤葦に無言で続きを促す。

「巨乳で、とにかくよく感じておかしくなる系のばっか見せてくるじゃないですか。残念ながら俺は巨乳じゃないんで、それ以外の要素を取り入れてみたんですけど、実は俺乳首はそんなに感じないみたいです」

「ってことはつまり……？」

赤葦は木兎の方を見ない。

しばらく待つとやがてぼそりと呟いた。

「……乳首は感じません、正直下触ってくれた方が何百倍も気持ちがいいです」

「!!」

今までの情事が走馬灯のように駆け巡る。

もう駄目だと泣き喚く彼も、首を振って快感に耐える健気な姿も嘘だったとでも言うのか。

感じたフリをしている赤葦にぬか喜びして浅ましく腰を突き動かした自分が恥ずかしい。

ただ、木兎は赤葦に対して怒りも呆れもしなかった。演技をしてまで木兎に付き合うくらいには好かれていることをきちんと理解している。

まさか赤葦がこれっぽっちも乳首が感じないなんて全く気が付かなかったし、木兎自身と同じかそれ以上に感じていると思っていた分、赤葦の言葉が鋭利なナイフの如く木兎に突き刺さった。

上を任された男としてのプライドがズタズタになった木兎はこの状況が非常にまずいと感じていた。

木兎のプランではアダルトビデオを見て発情した赤葦と情事に持ち込む算段でゴムやらローションやらを完備していたのが、

あろうことかこんな話を聞かされた後では手が出せない。

ダラダラと滝のような汗をかき始めた木兎に対し、赤葦はこれまたどうでも良さそうに、しかし僅かに期待を滲ませて鼻で笑った。

「俺だって男なんですからああいふ女の部分を求められても困ります。まあ、そんなこと気にしてる余裕がないくらい俺が感じた意味ないんですけどね？」

挑発だ。

普段いらぬ神経を使って演技している自身のプライドが何もかもなくなるくらい快感に溺れさせてみる、と言われてる。

「ブチ、と木兎の何かが切れた音がした。」

「わかった」

木兎は笑顔を張り付けてはいるが、額には青筋が浮かんでるのを隠せていない。

怒りも呆れもしないと考えたのを撤回する。

赤葦のカチンとくる物言いにもともと気が長い方ではなかった木兎を刺激してしまったようだった。

「そんなに言うならやってやる！ お前覚悟しとけよ、絶対にヒイヒイ言わせてやるからな！」

「やれるもんならどうぞ？ もし結果が出なかったら俺が木兎さん抱きます。俺よりよっぽどおっぱいあるし」

「ねえよ……」

「あるじゃないですか、俺より触りがいありますって」

「赤葦くんやめて！」

そう言っただけで木兎は両手で自分の胸を隠す。

何やら恐ろしいことを言い始めた赤葦に、木兎は自身の尻が貫かれてしまう前に何とかすることを決意した。

たとえどんなことをしようとも、正当防衛だ。

ありとあらゆる方法をもって赤葦を攻略しなければ逆に赤葦に攻略されてしまうような気がした。

感じないと言われてしまった乳首を感じるまで育ててプライドを粉々にしてやる、と木兎は意気込み、半分以上食べられてしまったスナック菓子を口に流し入れる。

結局、一切赤葦に手を出すことのないまま、一日を終えた。

「……よし」

パソコンのウェブサイトを閉じる。

先程まで開かれていた通販のページに書かれていた謳い文句を思い返して笑う。

『平らな男性の胸でも安定の吸引力。ローター付乳首カップ』

透明な搾乳機を模したカップの内部にローターが取り付けられており、吸引と同時にローターが振動して乳首に刺激を送るというアダルトグッズだ。

凶悪なカップをつけられた赤葦の姿を想像していたら手が勝手にカーッと突っ込んでいた。

なんとなく運命を感じて購入してみる。

腫れあがった乳首を散々弄ってやったらいつか母乳も出しそうだ、なんて考え始めたところで股間が熱くなった気がした。

「今月はしばらく節約しないとなあ」

大きな買い物をしたのだから効果がないと困る。

全てはこの乳首カップの性能と吸引力にかけるしかない。

お急ぎ便で頼んだそれは日を待たずしてやってきた。
厳重に封をされた段ボールを乱暴に開封して、説明書を熟読する。

こんなものを真剣に読む日が来るなんて思ってもみなかったが、スイッチを入れた瞬間の振動が相まって凶暴な物に見えてしまつてからは期待に胸が膨らんだ。

木兎はニヤニヤと顔を緩ませてアダルトグッズを箱の中に仕舞い、目立たないようにベッドサイドの収納スペースに隠し入れる。

「赤葦の乳首不感症は俺が治してやるからな」

翌日、部活でヘトヘトになっている体のまま赤葦を自宅に誘う。

赤葦の不感症を治してやるから今日は家に来い、と強制的に言えば、赤葦も先の件を覚えていたようで気の抜けた返事を返した。

「ああ、この間のやつですか？ あと勝手に俺のこと不感症にするのやめてくれませんか？」

ぶつくさと文句を垂れる。

そのまま服を脱ぎ捨てた赤葦に、それでもやる気はあるんだなど揶揄するように笑う。

「一体何を覚えてきたのかは知りませんが、自信ありげに言われたらその自信へし折って俺がシてあげますからね」

怖いぐらいの笑顔で答えられた木兎は変に煽ってしまったことを少しだけ後悔した。

見れば以前と変わらず赤葦の乳首が存在している。
変わっているわけがないのだが、これから作り変えるつもりなのだ、この無垢な乳首も見納めになるだろう。

するりと木兎の無骨な指が赤葦の胸元をなぞる。
乾いた肌をカリカリと引っ掻いても、今の赤葦は何の反応も返さなかった。

「えっ」

以前の彼ならばこのくらいの刺激で小さく反応を示していたのが、本音を漏らしたことに一切なくなっている。

せめてリップサービスでも反応の一つをもらえていれば木兎のテンションもモチベーションも上がるというのに。

「やる気あるんですか？ 木兎さん」

「……そんな事言えるのも今の内だからな」

強がって木兎が返す。

最終兵器を出すのはまだ早い。

剥き出しになったままの乳首に顔を寄せ、生温かい息を吹きかけた。肌が粟立ち、柔らかい乳首が固くなっていくまで、ひたすらに吸ったり、噛んだりして感覚を染み込ませる。

それでも尚喘ぎ声一つ零さない赤葦に落ち込みながらも、ふと強めに噛んだ瞬間眉を顰めて息を詰まらせたのを確認した。

感じないのではない。ただ快感に鈍いだけなのではないか。

現に強い痛みには反応を返す。

ますます購入したアダルトグッズへの期待が高まる。

「……っい、」

痛みを与えてから、傷を慰める獣のように優しく舐め、撫でてやる。

「木兎さん！ 痛いんですけどっ」

「でもさ、——感じない訳じゃないんだろ？」

感じないって言ってたけど、痛みを感じるなら快感だって拾えるようになるはず。

木兎はそう考えてベッドサイドに視線を向けた。

荒い手を使っている自覚はあった。

しかし何故か止められない。一度火がついてしまえばもう自制心が利かなくなった。

そつとベッドサイドに手を伸ばし、アダルトグッズの入った箱を取り出す。

「？ 何ですか、その箱は」

赤葦が訝しんで聞いてくるのを無視してバリバリと袋からそれを出し、見せつけた。

「ふっふっふ……じゃじゃーん！ 乳首カップ」

某未来型ロボットが便利グッズを出した時のように声を上げる。

それを聞いた瞬間に見せた赤葦の酷く歪んだ顔はなぜか木兎を興奮させた。

「ほんつと何ですか！？ それ！」

「え？ 見ての通り」

アダルトグッズだよ、と赤葦の目の前でそれを掲げる。

馬鹿なことをしているのは木兎にだってわかってる。

「本気ですか……これ、見た目最悪なんですけど」

「それは俺も思う」

凶悪だよな、と眺めるそれは届いた時と同じようにここにあって。

見た目をさることながら吸引カップの中にはローターが付いている。

これで吸引され、腫れあがった乳首をローターが押しつぶされる感覚は一体どんなものだろうか。

「いやあ楽しみだよな」

赤葦の胸元を撫で、カップを片方だけ取り付ける。

まずはどれ程吸引して見た目が変わるのか比較したい。

右の胸に装着し、鼓動を少し早めながらスイッチを弱に入れた。

ヴヴヴ、と微弱な音を立てて吸引を始める。

「うっわ、……っ」

カップの内側の皮膚が引っ張られて乳首がローターに押し付けられるのを眺める。

赤葦は無理矢理吸引される右胸の感覚に少し戸惑うくらいで、特に何かを感じているわけではなさそうだった。

「うーん、最初から弱いんじゃないかな」

ふと悪巧みをするような顔をして手元のスイッチを弱から強に変える。

「ッ！ いっ、た……っ！」

先程より大げさな音を立て、より強く動く。

さすがに痛みを伴うのか、赤葦の表情が青ざめる。

「ぼ、木兎さん、ちょ、つと痛すぎ……ッ！」

目には涙が浮かんでいるのを見て、ちよつとやりすぎたかもしれない。

「あ、やっぱ痛い？ ごめん！ すぐ止める！」

慌ててスイッチをオフに切り替え、カップを外す。

強い吸引に皮膚が真っ赤になり、胸元が腫れあがったようになっ

てしまっている。その差は左の胸を見たときと歴然で、心なしか少し乳首が膨らんだように見えた。

「ちょっと腫れてんなあ、大丈夫か？」

「他人事みたい……！——っ！」

木兎が腫れあがった胸をそっと撫でると赤葦がびくりと過剰な反応を示した。

「？ どした、赤葦」

「あ、いや、木兎さん、そこ触らないでください」

頬を染めて視線を逸らした赤葦を見て、始めは痛かったのかもと思ったのかもしれないと感じているのでは、と確信を呼んだ。

「ひ、い……っ」

傷口に塩を塗られたような痺れが赤葦を襲い、漏れ出た声が木兎の耳を擦る。

随分と甘い声で鳴く。

今まで聞いてきたどの喘ぎ声よりも自然で、少し低くて擦れた声は魅惑的だった。

それがもつと聞きたくて、ふつくらとした乳首を抓る。

「ひや……？ あ、ん木兎さん……それ、ヤバイ」

手の甲を口に押し当てて耐える赤葦がいつも以上に可愛く見えてきた。

乳頭を限界まで勃たせるように親指と人差し指が抜く。

「あつ！ つくそ、なんで、こんな」

「痛いのに感じるんだって？ そりゃ才能だろ」

乳首で感じる才能があったからに他ならない、なんて木兎がふざけて右胸を愛でる。

赤く膨らませている乳首を触るのが楽しいらしく、乳輪の中に押し込むように潰せば、赤葦から絶えず声が上がった。

見るからに変わってしまったそこは未だ手付かずの左胸とは

大違いだ。なんとなく乳首が大きく見える。

「強にしたらいふ育ったな」

しかしこれもすぐに元通りになってしまいうだろう。

時間を空けずに吸引し続けられればこの乳首が定着するのだろうか。

それはそれで楽しみだ。

「育ったとか言わないでください、い」

気まずそうに視線を逸らす赤葦の頬にキスをして、さて、もっと感じてもらうにはどうすればいいか考える。

いつそのこと泣き叫ぶまで吸引してやろうかと邪な考えが浮かんでは消える。

せっかく購入したのだから痛みつきになるくらい開発したい。

それに今の右胸ならもしかすると弱でも感じるかもしれない。

現に、赤葦の下半身は若干雁首を擡げている。

彼自身はアダルトグッズに意識が向いていて気が付いていない。

い。

「なあ、もっかいしていい？」

「つは、え、まだするんすか」

若干戸惑い気味の赤葦に、木兎は大丈夫、と笑った。

「今度は痛くしねーから！」

満面の笑顔で言ったはずなのに、赤葦の顔は青ざめるばかりであった。

「……っ、い、いつまでそうしてるん、ですか！ つひ！」

じくじくとした痛みと、もどかしい何かがせめぎ合うのを感じ

しながら、かれこれ一時間経過していた。

両胸にカップを装着させられ、時折きつく吸引されたかと思えば、緩く振動して吸引が弱まるのを繰り返すそれを赤葦は恨めし気に見やっていた。

搾乳機のように強く吸われると、勃起した乳首が中で振動するローターに当たり、振動から逃げるように背中を反らしてしまふ。

完全に無意識の行為だが、胸を突き出すような格好になり、もつと当ててほしいと強請っている姿にも見えた。

これを取り外すことは木兎が許さないため、何でも胸に向かう両腕はとくに木兎によって拘束されていた。

胸部を襲う刺激に体を振らせながら木兎の腕を振りほどこうと躍起になるが、それも叶わず、暴力的な刺激を享受するがままになつてしまっている。

透明なカップから見えるほんのり色づいた肌に真っ赤な乳首がよく映えていた。

少々過敏になつていのか、強度を変える度に体がピクリと痙攣するのがわかる。

「あ、……っこんな、女みたい……」

女みたいに感じるなんて。

赤葦の顔が屈辱と羞恥に染まる。

「そうだよな、乳首しか触ってないのに勃てるんだもん」
目敏くも下半身をしっかりと反応していることに気が付いていた木兎が赤葦の羞恥心を煽っていく。

真っ赤に熱れた先端からはとめどなく先走りを溢している。

先走りだけを指で掬って腹部に擦り付けると、赤葦が焦れて口を開いた。

「……か」

蚊の鳴くような声で赤葦が何かをこぼす。

「ん？　なんだって？」

赤葦の言いたいことはだいたい分かっている。

分かっているが、どうしても彼自身からはっきりと口にさせたくて、つい意地悪をして聞き返す。

「……触ってくれないんですか、」

恥ずかしくて仕方ありません、といった面持ちで、俯いた赤葦の白いうなじを眺めて木兎は舌なめずりをした。

「うん、赤葦の可愛さに免じて今日はいいイかせてやる」
あくまでも今日はの話だ。

次回からはなんとしてでも乳首で沢山イってもらおう。

脈アリであることに確信を持った木兎は今後のことを考えてほくそ笑んだ。

「どう？　赤葦、乳首感じないとか嘘だろ？」

「どうもこうもないですよ……俺このままだと乳首だけでイってもおかしくないくらいです」

「！　マジか赤葦！」

その数日後、やたらと乳首がムズムズして対策を練る赤葦がいたとか。

了



Happy Birthday bekutosan!